

[研究ノート]

土佐派絵師列伝⑤ 土佐光信

—室町土佐派の中興、激動の半世紀—

おそらく中世の最も著名なやまと絵師は土佐光信でしょう。江戸時代以降の画史や鑑定などをみると、「古土佐」や「土佐光信真筆」などとされるものは枚挙にいとまがありません。こうした近世における大画家・光信像は、画壇の中核を占めた狩野派との縁戚関係や、土佐光起に代表される江戸時代土佐派の隆盛とも深くかわりながら形成されたものですが、なによりも実際の光信の活動自体が同時代の絵師としては際立って活発であったことに端を発すると思われます。主要なものを以下に掲げます。

寛正3年(1462)6~7月、義政室町殿の舞楽図襖絵を描く。
 文明元年(1469)10月、絵所預となる。
 文明9年(1477)12月、洛中・大炊御門高倉に居住。
 明応4年(1495)7月、「槻峯寺建立修行縁起絵巻」を描く。
 文亀元年(1501)10月、三条西実隆の肖像を描く。
 文亀3年(1503)4月、「北野天神縁起絵巻」を描く。
 永正14年(1517)9月、「清水寺縁起絵巻」を描く。

光信の活動の初出は、足利義政の邸宅・室町殿に舞楽図の襖絵を描いた記事です。この事業を主導したのは土佐広周でした。広周は光信より一世代上の傍系に属し、若き光信の後見的役割を果たしたと推定されます。

(系図)

藤原行光 — 六角寂濟 — 藤原光国
 — 藤原光重 — 藤原行秀 — 土佐光弘 — 土佐光信 — 土佐光茂
 — 土佐行広 — 土佐広周

光信は、応仁の乱の最中に絵所預となり、このあとおよそ半世紀にわたってその座を占めます。光信の制作領域は、障屏画・肖像画・絵巻・仏画など多岐にわたっており、晩年はプロ級の腕前を持つ連歌師として貴顕と親交を深めるなど、まさにその活躍は八面六臂です。現存作例のうち、三つの絵巻が代表的な大作といえますが、応仁の乱後にける混沌とした政権闘争の中で、光信の活動がいかにかこれと連動していたかがわかる点で重要です。「槻峯寺建立修行縁起絵巻」(フリーア美術館蔵)は、摂津国と丹波国の国境、現在の大阪府能勢町の剣尾山頂にかつて所在した修験系寺院・月峯寺の縁起を描いたものです。本絵巻は制作の二年前にクーデターにより政権を掌握した細川政元が、自らの領国の国境に所在し、自ら深く傾倒した修験の寺院の縁起絵巻を制作させ、奉納し、その政権安定を祈願したものと考えられます。「清水寺縁起絵巻」(東京国立博物館蔵)は、坂上田村麻呂による寺院開基と観音の靈験を描いたもので、関白・近衛尚通と弟・興福寺一乗院良譽が中心となって制作させたものでした。その内容と当時の政治状況を照らし合わせると、近衛家と縁戚であった流浪の將軍・足利義種と、伝説の征夷大將軍・田村麻呂を重ね、その政権基盤の強化を祈ったものと推測されます。

つまり、光信は戦国初期の転変する武家政権と常に近い関係を維持し続けていたのです。

さて、上記のような光信の活動を考える上で興味深い史料があります。天理図書館に所蔵される『大館記』(『ビブリア』85、1985年、に翻刻)には、応仁の乱後、足利義尚から義晴期にかけて將軍家に近侍した大館常興(俗名・尚氏、一四五四~)、その子晴光(一五一五~五五)、輝氏の三代が残した故実書などが収載されています。ここには以下のような記述があります。「次、絵書之土佐將監父にて候と存候、折々ほしを着候て、祇候仕候事もいにしへ見及候と存候、又、かさ折直垂にて参候時も候しと存候、此段も、細々御絵御用之事候時、折々ほし・小すわうにて参勤仕候への御事にて、如此候やうに承候つる、雖非慥候、先存分言上仕候、」。ここにある「土佐將監」とは年代的に土佐光茂を指し、その父とは光信のことと思われます。内容をみると、絵画制作のために將軍邸に召された光信は、はじめ「風折鳥帽子に直垂」という正装であったのが、参勤があまりに頻繁なため「折鳥帽子に小素襖」という略装を許されたことがわかります。現代に置き換えるならば、首相官邸に絵を描くことを依頼された画家が、最初のうちはモーニング着用であったものが、途中からノーネクタイで来るように指示された、といったところでしょうか。この記事からは、將軍と光信の極めて近い関係が窺えるのです。

こうした華やかな光信の活動を知った上で、その作品を見るといささかギャップがあるようにも思えます。たとえば、晩年の代表作「清水寺縁起絵巻」では、人物の輪郭など下絵の線と描き起こしにズレがみられますし、薄い絵の具を

用いた彩色も線からはみ出して乱雑に感じられる部分もあります。藤原行秀のもつ、古典的ともいえる丁寧な画面や濃麗な彩色とは一線を画するものであることは確かです。しかし、光信盛期の「槻峯寺建立修行縁起絵巻」をみれば、決して「下手」な絵師なのではなく、新たな表現を模索していたように感じます。輪郭線はスピード感のある素早い筆致を示し、彩色はあくまで澄明、現代の感覚でいう水彩画に近いものになっています。また、樹葉に青色、岩や土坡に緑色系の具色(パステルカラー)を多用するなど、一見型破りとも思える配色は画面の中で見事な調和を見せ、色彩画家としての天性の才を感じずにはいられません。ともすれば濃厚に塗りこめる伝統的やまと絵を、爽やかで涼やかな透明性のあるものへと導いたこと、それが光信のひとつの本質ではないでしょうか。こうした色彩の清涼感、は、狩野派にも大きな影響を与え、近世絵画の基調となっていくのです。その意味でも、光信は近世への転換点に位置する存在といえるでしょう。(高岸輝)

「土佐派絵師列伝」はこれにて完結します。ご愛読ありがとうございました。詳細な内容は、高岸輝著『室町王権と絵画—初期土佐派研究—』、京都大学学術出版会、2004年、をご参照ください。)

季刊 美のたより No.151

平成17年7月8日

発行 大和文華館